

改めて生活科の地域での
活動の価値を問いなおす

静岡大学教育学部教授 馬居政幸



今年の6月22日（土）、23日（日）、秋田市にある県民会館、生涯学習センター、秋田和洋女子高校、千秋公園を舞台に、日本生活科教育学会第5回全国（秋田）大会が開催された。その第一日目の午前、千秋公園で秋田大附属小ニクラスの子どもたちによる生活科提案授業が行われた。この活動過程で示された子どもたちの姿と、子どもたちを育ててこられた二人の先生の実践を通して子どもの“生きる世界”としての地域での生活科の活動の価値を問いなおしたい。

1. 秋田での提案授業

千秋公園での授業の一つは佐々木由喜子先生が担任する1年B組。単元名は「さあ 出発だ！緑の森のたんけんたい」。学習指導案に記された「本時の主眼」には、「千秋公園で遊びながら、樹木や植物、虫などとふれあい、ひみつをいっぱいみつげよう」とある。佐々木先生は単元に込めた子どもへの思いを、次のように綴っている。

「入学した頃から、『先生外で遊んでいい？』『今日は、お外で遊んじゃだめ？』少しくらい寒かろうが、水たまりができていようが、お構いなしの元気な子どもたち—中略—初めての学校探検は2年生のなかよしペアのお兄さん・お姉さんと一緒に出かけた。低学年広場で一緒に遊んでもらったり、動物たちのお世話の仕方を教えてもらったり……。2年生は1年生にとっても頼りになるお兄さん・お姉さんである。今、低学年広場では自分たちでいろいろな遊びを工夫して楽しんでいる。/千秋公園は、市民の憩いの場であり、子どもたち

にとっても四季折々様々な自然の贈り物をしてくれる。公園で遊んだり、秘密を探したりしながら自然に思いっきりひたり楽しんでほしい。自然に積極的にふれあうことができるように、いろいろなゲームも取り入れていきたい」

もう一つは2年A組の子どもたち。担任は池田裕先生。単元名は「すごいでしょ！あそび名人」である。「本時の主眼」には、「千秋公園の自然に親しみながら、自分たちのつくった遊びを楽しむ」とある。そして池田先生もまた子どもたちへの思いを次のように記している。

「『2年生になってどんなことがしたい？』という問いかけに、どんどんやりたいことがわき出してくる。/『千秋公園に行って、またさきぶねをきょうそうさせたいなあ』『1年生にも楽しいひみつのぼしよを教えてあげたいな』学校が大好きな子どもたち、千秋公園が大好きな子どもたち、1年生とも、もっと仲良くなりいたい子どもたち、そして何よりも遊ぶことが大好きな子どもたち—中略—プレイルーム、低学年広場では、1年生に

コンピュータを教えたり、一緒に遊びをしたり、動物さんの抱っこやし方を教えたりという子どもの姿が見られる。自分たちの時間の中で、状況に併せて可能な限りの遊びを考え楽しんでいる。／今回の活動は、そんな子どもたちが、身の回りの環境にも目を向けながら、大好きな千秋公園での遊びを考え、楽しみながら、自分たちの遊びをつくり出していく姿を期待して設定したものである。／上級生から教えてもらった遊び、家の人から教えてもらった遊び、それらを取り入れながらも、自分たちの新たな遊びをつくり出していく。子どもたちが遊びをつくり出していく姿は、自分自身をつくり出していく姿であるととらえている。／存分に遊びを楽しんだ子どもたちは、自然の中での活動を通し、豊かな創造力や知恵をふくらませることだろう。『ほかのクラスの子どもにも教えたいなあ』『1年生ともいっしょにあそびたいね』さらなる友だちとのかかわりに広がることも期待している。(下線はいずれも馬居)

実際の子どもたちの活動はどうであったか。

2. 水ぶきとミミズと泥まみれ

1年B組の活動の場は千秋公園の中の小川の周り。そこを全国から集まった先生たちが取り囲んだ。そのため、さすがに元気な1年生も、最初は観察する先生方の目を意識してか、川の淵を歩いて水の流れや周辺の草や木を見て(ひみつさがし?)いた。だが、水の中に入る子どもの増加とともに高まる歓声が、大人の目を忘れさせた。

笹の葉をもつ子はいても笹船にして流す、なんて悠長な遊びをする子はいない。足で水をけつとばして競争する子。流水の勢いととも転がる小石を川にはいつくばって追いかける子。やや大きな石を川に入れて噴水状にふき上がる水しぶきをあびながら、少し早い夏の水遊びを楽しむ子。

どうも「ひみつをいっばいみけつよう」という佐々木先生の思いを、子どもたちは水しぶきとともに吹き飛ばしてしまったようである。

ところが、そんな1年A組の子どもたちを横目で見ながら、足を水に少し入れてはやめる動作を何度か繰り返したあと、暫く悩んで立ち去った同年齢の子どもがいた。その先に何人かの大人が待っていた。土曜休日を利用して、家族とともに遊びにきていた子どもであった。

もう一人、少し小さな子どもが入りたくてたまらない、という顔をして川の側にたっていた。そこへカメラをもった女性が近寄り、その子を引き戻した。子どもはいやがって再び川に向かおうとするのを、女性は叱っている様子。どうも、学会に参加して提案授業を参観している先生とそのお子さんの様子。連れてきてあげたのだから大人しくしていなさい、ということであろうか。

他方、遊び名人になろうとした2年B組はどうであったか。やはり最初はとまどっていた。だがさすがは2年生。何人かのグループに別れて、だんだんと遊びの世界を創造しはじめた。

活動の場は1年生と異なり、小高い丘が突然切れて崖状になった斜面とその下にあるかなり濁った池(沼?)。そのため、池の中に入って遊ぶ子どもはいないが、手を突っ込み何かをさぐろうとする男の子はいた。岸の泥を掘って20センチ近いミミズ?を見つけ振り回して遊ぶ女の子もいた。雑草を足場に泥まみれで垂直に近い崖を競争しながら昇る男の子と女の子の仲間がいた。

確かに、2年生は「自分たちのつくった遊びを楽し」んではいた。だが、私の判断では池田先生が予想よりも、すさまじい光景になっていた。

加えて、ここでも興味深い親子にであった。公園に散歩に来ていた幼児(娘)と父親である。この子も沼の中に手をいれ、雑草につかまって崖を上がりたがった。だが折角の休みに可愛い娘と散歩にきたお父さんは、公園の草花の名前を教えた様子。それでも女の子はワイワイガヤガヤ遊んでいる先輩たちの方にいきたがった……が、許されないとわかれると、だんだん優しいお父さんに甘えるようになり、肩車をねだっていた。

3. 教材の素材ではなく活動の場と機会

本誌のテーマは「地域教材を開発する」。それをなぜ二つの授業の学習指導案と子どもたちの様子、さらには通りすがりの親子の姿を紹介してきたか。この三つの関係の中に、現代の子どもにとっての生活科の価値、特に学校の外の“子どもたちの生活の場（地域）”で“遊ぶ”活動の重要性が集約されていることに気付いたからである。

編集部による本稿への趣意書に、「各地の取り組みで、地域の特徴を生かした実践がなさよる一方で、教科書の展開に追従したような実践もみられ、同時期に同一の展開がなされるなどの画一的な生活科があるのも事実です。地域の中には、生活科の教材として活用できる素材が残されているのではないのでしょうか。地域の特徴を生かした創造的な生活科の展開をしたいものだと考えます」（下線は馬居）とあった。私は生活科の画一化への危惧と地域重視の視点に同意するが、地域教材あるいは下線部の表現に違和感を覚えた。理由は「教材」とは文字通り「教えるための材料」を意味する言葉であり、「生活科の教材として活用する素材」という表現は、教える内容が事前に明確であることが前提だからである。だが、生活科は活動すること自体が目標、特定の内容を教える手段として活動を組むのではない。もちろん、それは生活科は活動のみで学習がないという意味ではない。逆である。活動の過程で子どもが学びとる内容は非常に多様かつ一人一人異なるため、事前に限定するとかえって子どもの豊かな学びの可能性を止めることになる。教材開発という概念自体に画一化への芽が内在していると考える。

先に紹介した学習指導案の内容と実際の子どもたちの活動の様子を比較してほしい。生活科で自在に自己を表現する子どもたちと日々格闘している先生なら、私の拙い表現でも、両先生の思いを越えて子どもたちが元気に活動する姿を想像できよう。加えて、たとえ両先生が事前に何かを教え

ようと準備したとしても、千秋公園に散らばった子ども一人一人に即して確認することは不可能であることも理解できよう。抽出児を追うことで補う場合もあるが、それはあくまで教師の側の都合、子ども一人一人の学びの保証ではない。

では、本時の場合、先生は必要ないのか。当然否である。千秋公園を子どもたちの豊かな活動と体験の場に転換したのは二人の先生。誤解を恐れずにいえば、生活科にとって地域とは、何かを教えるための素材を求める場ではない。“家庭と学校の間（あいだ）の世界”を、子どもたち五感全てを使って“自分を表現できる場と機会”に転換できるかどうか、生活科の地域へのかかわりの最重要課題。地域の教育力は既にあるものではなく、“生活科の活動を契機に創るもの”である。

ただし、いかに活動が豊かでも、本時が指導案と異なる展開になったことは事実。とすれば、この提案授業は失敗だったのか。授業終了後に開催された検討会での最初の発言は「素晴らしい活動でした。子どもたちが泥まみれだったからです」との活動を評価する意見であった。だがその後は「休み時間との違いは」、「子どもは事前に課題もっていたか」、「子どもにまかせた安易な展開ではないか」といった質問が続出した。思うにこのような問いの前提に、教える材を求める意識とセットになった特定の知識あるいは目に見える技能を教えているという実感がなければ、さらにはその教えた結果を確認・評価できなければ授業ではない、という考えがないか。だが、改めて考えてほしい、どのような場合に子どもは元気に遊ぶかを。それは主体的、意欲的に取り組んでいる証拠ではないか。主体的、意欲的な行動には、その子なりの表現や学びがないか。問題はそれらを見いだせない（見ない）教師の側ではないか。

では千秋公園で子どもたちは何を学んだか。ヒントは「泥まみれ」を評価する言葉。泥のついたお尻から、子ども一人一人に即した、その子なりの豊かな学びの過程を読み取れるからである。

改めて学習指導案をみてほしい。佐々木先生は子どもの意欲を入学時から積極的に受け入れる一方で、その具体化の方法を自分で教えるのではなく、学校探検や低学年広場で先輩（2年生）から学びとることを願って支え援けてきたことが理解できよう。千秋公園での活動とは、このような学校の中で自ら培った力を、学校の外の自然と格闘しながら友だちといっしょになって全力で表現する場と機会。その価値を象徴するのが「自然におもいきりひたり、楽しんでほしい」という言葉。ここに込められた佐々木先生の支援の過程こそ、小川の水と格闘する子どもたちの活動の源泉と考える。そして、「身の回りの環境にも目を向けながら、大好きな千秋公園での遊びを考え、楽しみながら……子どもたちが遊びをつくり出していく姿は、自分自身をつくり出していく姿」との池田先生のこの活動に込めた思いの表現こそ、学校でも家庭でもなく、地域を舞台にした生活科の活動の価値を最も適切に示す言葉と考える。

だが、検討会での質問のように、このような活動の価値は認めても、それは学校ではなく地域や家庭の課題。なぜ、授業として実践する必要があるのか、との疑問をもつ方もおられよう。ヒントは川に入れなかった二人の子どもと、父親に甘えざるをえなかった女の子の姿である。私はこの対比の中に、かつてない少子社会に生まれた現代の子ども固有の育ちの困難さを読み取った。

4. 地域を育ち、学び、教え合う世界に

少子化による教育問題として出生数減少に伴う量的側面が取り上げられることが多い。だが子どもの育ちとの関連では、出生率減少に伴う質的側面こそ重要である。例えば、平成七年の合計特殊出生率（女性が生涯に産む子供の平均値）は再び1.46、子どもが一人の時代との報道もあった。だがそれは誤解。日本の既婚女性が産む子どもの数の平均二人は維持されている。出生率低下の原因は晩婚化、子供を産まない（産んでいない）女性

の増加である。日本の家庭は既に昭和三十年代に子ども二人の時代になっていた。

すなわち、現在の少子化の特性は、家の中の子どもの数ではなく、子どもをもつ家庭自体の減少である。それは家庭の外（地域）から子どもが消えることを意味する。それを示唆するのが人口千人比での出生率の減少。平成7年は団塊の世代の4/1、団塊ジュニアの2/1。どこでも先輩、後輩、仲間がいたのが団塊の世代。そのジュニアは家の中が二人になり家の外で先輩や後輩を失ったが、同年齢の仲間はいた。現在の子どもは家の中には二人いるが、家の外では仲間をも失った。

したがって、現在の少子化世代固有の問題は近所の遊び中間を失い、学校でしか友だちと会えなくなったこと。それは大人の目を逃れて、子どもたちが“学びあい、育ちあい、教えあう世界”が縮小（喪失？）し、子どもが一人の人間として自律してゆく契機を見失うことを意味する。おまけに友のかわりに、両親と二組の祖父母の愛情と財布の中身がつぎ込まれる。シックスポケット効果によるハイクオリティチャイルドの誕生。だが、それは大人の都合にあわせた愛情と安全でくるまれた未熟さから子どもたちが逃れないことである。

たとえ地域に公園や小川や丘があっても、遊び仲間を失い、良い子を演じ続けなければならない子どもには、水と泥で汚れる選択肢はない。より深刻なのは、川に入る意欲すら失い、幼児のように親に甘える世界に安住する子ども。

彼ら彼女にとって必要な自立への基礎とは、自己をとりまく環境と全力で格闘する過程で自分を精一杯表現する体験。それを強制ではなく“楽しんで行うための機会と場を創造”し、“意欲とその表現方法自体を子どもたち相互のかかわりの中で育む”こと。これが、少子時代の子どもが仲間を見出すことが可能な学校という場のみが、子どもの生きる場である地域を舞台に展開できる現代固有の教育活動、すなわち生活科の価値と考える。



波 紋	考える楽しさ……………岡崎 彰………… 8
	じわじわと効いてくる師の教え……………中山 迅………… 9
3学年の理科	わくわく、ドキドキ体験……………吉岡 勉…………10
4学年の理科	体験を通して学び追究する……………石川喜三郎…………13
5学年の理科	自由研究の進め方……………山下 悟…………16
6学年の理科	くらしの中に不思議がいっぱい……………米田 一毅…………19
8月の学級実践 I	研究会の効果的参加の方法……………大田 稔…………22
8月の学級実践 II	やる気がでる宿題……………横山 充郎…………23
ワンポイントLesson	授業の改善は雰囲気作りから……………野本 浩司…………24
理科室経営	星空の限りない夢と広さを自分の目で……………藤本 泰雄…………25

理科主題 新しい子供観と理科授業

座談会

新しい子供観を授業に生かす……………角屋重樹 市川伸一 板垣 慧	
	山口令司 森田和良…………28

論 説

学習指導のスキーマ・アプローチに向けて……………進藤 公夫…………36

主題研究

新しい子供観と理科の授業……………森田 和良…………40	
——6年「電流のはたらき」	☆主題研究を読んで……………鏑木 良夫…………44
構成主義を越えて……………溝辺 和成…………45	
——社会・文化的アプローチから見た教室	☆主題研究を読んで……………大西 秀彦…………49



◆ これからの理科教育を展望する

生きる力としての理科学力	高野 恒雄	50
■ 実験・観察講座 電気エネルギーへの変換装置	佐島 規	54
自然観察のすすめ 感動は忘れない	新井 一政	56
■ 授業とコンピュータ 問題解決活動中でのコンピュータ活用	荒田 修一	58
■ 子どもの研究 (平成7年度全国児童才能開発コンテスト文部大臣賞受賞)		
なめくじにんじャと おともだち (松井菜津美)	鈴木 寛一	60
■ 夏休みに推薦したい本		64
■ 私と理科教育 出会い, そして, 課題へ	村山 哲哉	67
★編集後記・次号予告		92
★口絵構成	梶山 朗 他	

生活科主題 地域教材を開発する

生活科ゼミナール

改めて生活科の地域での活動の価値を問いなおす	馬居 政幸	70
------------------------	-------	----

生活科主題研究

「サワガニ」の活動で感激, 「串柿」の実践でガックリ	西山カヨコ	74
地域素材の開発	沼澤千佳子	76
地域の素材を生かした授業作り	福富 紀子	78

■ 生活科の新情報発信 生活科とコンピュータ	中島 保夫	80
■ 幼児と環境 環境マップを作ろう!	阿部 千春	82
1学年の生活科 砂や赤土であそぼう	野口克子 堀 知子	85
2学年の生活科 ようちえんのともだちとなかよし	田岡 佳美	88

初等理科教育

ELEMENTARY SCHOOL SCIENCE EDUCATION

新しい子供観と理科授業

1996

Vol.30 No.9



生活科

地域教材を開発する



■ 座談会

角屋 重樹

市川 伸一 他

■ 論 説

進藤 公夫

■ 主題研究

森田 和良

溝辺 和成

■ 生活科ゼミ

馬居 政幸

■ 主題研究

沼澤千佳子

西山カヨコ

福富 紀子

座談会◇新しい子供観を授業に生かす